はじめに

短いといえば、実に短い１２日間の旅でした。

しかし、この旅には、さまざまな期待、希望がこめられていました。

ひとりの北欧ツアーは、参加者にとってそれほど簡単に現実化できるものではなかったと思います。約２週間を空けるのにはあまりにも忙しく、したがって相当の覚悟と周囲の支えがなければ参加できなかった人も多かったはずです。また、健康問題などの心配も少なからぬ人たちに二の足を踏ませかねなかったと思います。しかも、旅費を含む費用を容易に出すことができるメンバーはほとんどなかったといえるでしょう。にもかかわらず、全員が頑張りきったのは、この旅に寄せる思いの熱さ、大きさがそれぞれにあったからこそであるといわなければなりません。

このような期待から見ると、「障害者の生活を考える」このツアーは、あっけない思い残すところも多いものであったといえるかもしれません。二つの国の障害者の生活を見るにはあまりにもわずかな日程であったこともさることながら、企画にあずかったものの責任もあります。海外旅行の経験の乏しい者が企画に当たり、結局は予定していた旅行社を変更せざるを得なくなったことはその最大のものです。ですから、北欧の事情に詳しいホライゾンの深井さんに出会えたのは実に幸いなことでしたが、きわめて短い準備期間で計画しなければならなくなりました。また、私たち参加者は、障害者の生活、あるいは教育、労働、福祉等に直接関わり、あるいはこのような問題に関心を持つ者という共通点をもちながらも、それぞれの関心の対象、分野はむしろきわめて多様でありました。そのそれぞれが関心を持っている課題を深くとらえるには中途半端であったともいえるかもしれません。ごく共通した課題意識で結ばれた数人程度の規模のツアーであればできたかもしれないことがこのツアーでは実現しなかったことが多かったともいえるでしょう。

・　　・

そのような限界があったにもかかわらず、私たちのメンバーは、実に貪欲にデンマークとスウェーデンを見聞し、楽しみ、たくさんのものを心にきざんで帰ることができました。

デンマークでは、ひとつの地域の中で、乳幼児から成人に至るまでの障害者福祉の流れ、全体構造をおぼろげながらではあったとしてもつかむことができました。スウェーデンでは、重度の身体障害

をもつ人のくらしをじかに訪問することができ、この国の福祉施策をこの目で確認することができました。

けれども同時に、このツアーを有意義なものとなし得たのはメンバーのすばらしさでもあったと思います。「友だちの友だちはみな友だち」という論法でいけばみんなもともとの友だちにちがいない私たちですが、実際に全員が互いを知り合えたのは出発当日のことでした。そのそれぞれが、旅のおわりには旧知の仲であったような知り合いになれました。それぞれの分野で重要な役割を果たしているメンバーが、それぞれの個性、持ち味を発揮し、互いに協力し合うことができたからこそ、今回のツアーが実り多いものになったのだと思います。

もちろん、ツアーの成果の中身は、それぞれの心の中に残されています。何でも見てやろうとばかり旺盛な「調査活動」を連日展開した人、焦点を絞り込んで見ようとした人、子連れ「新婚」旅行を実現した人、夫婦の新しい絆をつかみ取ったであろう人、主として夜に活躍した人、買い物に精を出した人等々、それぞれに個性的な行動をしつつ、みんなでまとまったツアーをすることができたことは、今後にも相互に利用しあい活かせることであると思います。自分は○○のことを中心に見てきたけれど、××のことならあの人に聞けばいい、などと。

このことは、メンバーの多彩さが、個々の要求を満たされたか否かは別として、今回のツアー団としては実に多くの成果を上げたことを示唆すると思います。それぞれが見た北欧がそれぞれなりであることによって、それらを集めたら短期間であることを感じさせない収穫があったと思われるのです。今回の報告集を発行する意義もそこにあるといってよいと思われます。それぞれの見た北欧を総合することによって私たちメンバー自身にとっても、また報告集を読まれる多くの方々にとっても学ぶところがあると考えるのです。

今回のツアーのメンバーが共通に得た成果のひとつは、二つの国を訪問することによって、全障研、障全協、共作連など私たちの関

▲ヨーテボリ　ブリュッケオステルゴートにて

する組織で考えてきた理念や進めてきた研究・実践・運動に確信をもつことができたことだと思います。ノーマライゼーション、インテグレーションなどが、訪れた二つの国で行われている現実は、私たちが日本で主張し、取り組んでいることと基本的に合致するものであることが確認されたことは大きな力づけになりました。

私自身の感想としていえば、二つの国でなされ、めざされていることは、私たちの国でいくつかの分野で深められつつある発達保障の思想と全く軌を一にするものであったということができ、いま考えようとしている「自立」を考える上でも、これまでの思いに確信を与え、さらに新しいいくつかの視点を学ぶことができたと感じています。

また、多くのメンバーがこのツアーを通して共通に感じた成果のもうひとつ、というより抱いた課題意識は、あらためて日本の障害者問題や社会福祉を進歩、発展させていくとりくみのあり方についてです。民主主義の前進、発展がキーになることは、二つの国でも語られ、私たちも感じ合ったことですが、私は、それをつくり出す主体の形成、つまり私自身の研究テーマである人間発達の課題の大きさを再確認させられたように思います。

私自身の感想をつけ加えると、デンマークもスウェーデンも美しい自然の多い、そして街そのものもゆったりしたところでありましたが、物質的には日本も捨てたものではないと感じました。パソコンなどの技術や利用の発展状況にしても、リフトバスの数にしても、そして、もしかしたら障害者に対する実践の理念、理論化にしても日本は後れをとっているどころか、むしろ越えている面が少なくないと感じました。つまり、誤解を恐れずにいえば、北欧はある意味で貧しさの中で現在を築き上げてきたのではないか、日本に足りないものは、社会システムの貧困と発達保障の思想・理論などの成果がごくわずかの人々のものにしかなっていないことであって、それさえクリアーできれば十分デンマーク、スウェーデンの現実を作り上げることができるのではないかと感じたのです。それができたら苦労はないさ、という声が聞こえてきそうですが、私としては、時間はかかっても、わが国が今日の北欧をのりこえる可能性を確信できたのは大きな収穫でした。

そして、私はこのツアーを通じて、北欧の現在をつくりあげる背景になったのは、もしかしたらきびしい自然ではないかという仮説をもち、その検証をしてみたいという気にさせられました。私たちが今回訪れたのは、夏をようやく過ぎ秋を迎えた時期であって、仮説の実証には不向きなときでしたが、北欧の人々はきびしい自然とたたかい、一方でそのなかで生きるためには相互の協力・援助が必要であることを骨の髄まで感じ、共に生きていけるために合理性を養ったのではないか、そして他方で、いくらたたかっても勝つこと

のできない大きな自然の力に対し、甘んじてそれを受け入れ自然を自然のままで大切にしようとしているのではないか、などと考えていました。

このような思いに誘われたのは、私自身が「生きていることが本当に幸せなのか」「治る可能性のない障害者に『療育』などといわずにその日その日をおくらせたらいいじゃないか」などといわれていた重症心身障害をもった人たちの現場にいて、貧しい中で小さな実践の成果を大切にし、そのなかで共同して思想を深め理論化を図ろうとしてきた若いころの経験を持っていたことと関係しています。この紙面にこれ以上ふれることはできませんが、このような、科学者であるというより文学者のような発想をもって二つの国を見てきました。そして今度訪れるときはあえて冬にしようなどと思ったことでした。

・　　・

図らずも、ツアーの団長に推された私でしたが、事務局ニュースを二度出した以外それといって何をしたわけでもなく、英会話が苦手で挨拶要員としても役に立たず、他方やるべきことを忘れたり、ひんしゅくを買ったり、プレッシャーを感じさせたりなど反省すべきことがたくさんありましたが、無事の帰国を迎えられたのは、事務局メンバーをはじめ参加者のおかげだと感謝しています。

最後になりましたが、ホライゾンの深井聡男さん、およびこのツアーで通訳や手配などでお世話になった方々、そして何よりも私たちの訪問をあたたかく迎えて下さった二つの国の障害者、関係者の方々に対し、巻末にお名前を記し感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

１９９３年９月
ツアー団を代表して

加藤　直樹